目次

はじめに……1
名句と名文――『奥の細道』――……8
発句と文章――白河・松島・平泉――……16
『奥の細道』以前の紀行文の一例……17
松島の描写……19
大門の跡……23
大門の跡は一里こなた……24
藤原氏の営為と遺跡……26
奥羽の三名松――芭蕉の描く松――……34
『奥の細道』、その他の松山、松原……42
詩歌の中の松……47

芭蕉の描く松……49
絵画にみる松について……53
古代大和絵に描かれた松……54
水墨画に描かれた松……55
室町末期・桃山時代の大和絵の松……56
宗達・光琳の描いた松……58
二条城二の丸の探幽の松……59
江戸中・末期に描かれた松……60
おわりに……61
笠嶋……64
五月雨……64
実方朝臣……73
封人の家――蚤しらみ――……84
はじめに……84

「蚤虱……」の句の解釈について……85
封人の家……86
封人の家への異説……88
鳴子町に残された民家……89
おわりに……92
山寺の蟬――蟬の詩情――……93
はじめに……93
『懐風藻』の中の蟬……94
羽黒山の道のり――旅の思索――……106
象潟――隆起の地景――……116
はじめに……116
『奥の細道』の象潟の記述……117
象潟の絵図……119
地震による土地の隆起……120

おわりに……123
佐渡――心象の景――……125
三人の女性――童女・遊女・老女――……132
旅の疲れ――風に寄せる詩情――……143
金沢の一笑――幽鬼に泣く――……150
芭蕉の悼句……150
一笑と加賀の俳壇……154
夭折の嘆き……160
山中温泉――俳諧の種――……164
温泉頌……166
名所讃句……168
俳論書二種……171
後続する来訪者……173

石山の石――名所どころの名――……177
はじめに……177
解釈上の諸説……178
芭蕉の秋の風……181
おわりに……191
色の浜――小さきものと萩と――……192
大垣――次の旅立ち――……204
はじめに……204
「夢の浮橋」の末尾……207
『奥の細道』の大尾……210
おわりに……213
奥の細道の達成――文芸美への放浪――……216
はじめに……216
旅での体験……217

円熟期の発句……222
紀行文の完成と俳文への道程……234
おわりに……241
おわりに……245
『奥の細道』実地踏査概要……251

はじめに

『奥の細道』は、元禄二年（一六八九）芭蕉四十六歳の時、江戸を出発し、奥羽・北陸を経て、美濃大垣までの旅をもとにした紀行文である。江戸を三月二十七日に出発し、九月六日、大垣到着まで、旅程は六百里、日数は百五十日に及んでいる。

元禄二年は、一六〇三年に家康が江戸に幕府を開いてから、八十数年経っている。幕府強化の武断政治も三代家光で終止符をうち、四代家綱から七代家継までの六十五年（一六五一～一七一六）は、文治政治に変っていった。芭蕉が物心ついてから生涯を終えるまでは、文治教化の時代であった。

しかしこのような時代でありながら、芭蕉にとっては、そう容易な社会ではなかった。元禄文化を謳歌する豪商・町人たちの消費生活とは縁遠く、何を生業とし、生きていくかを模索しなければならなかった階層、身分であったのである。

芭蕉が俳諧に親しんだのは十九歳以降、主藤堂良忠に仕えたあたりからである。数年を経ずして主は没し、以降は好きなままに俳諧を嗜んでいたらしい。二十九歳、『貝おほひ』一巻を持して江戸に下向したのは、大きな決断であった。

江戸に出て数年にして俳諧師匠になったものの、間もなくこれを放擲、俳諧文芸樹立を目ざして深川の芭蕉庵に引篭った。時に芭蕉は三十七歳、以降元禄二年までの九年間は、俳諧文芸模作に没頭した。

名句と名文――『奥の細道』――

○

『奥の細道』の中から名句、名文章といわれるところを五つずつ選んでみると、わたしには、

夏草や兵どもが夢の跡　（平泉）
閑さや岩にしみ入る蟬の声　（立石寺）
五月雨をあつめて早し最上川　（最上川）
荒海や佐渡によこたふ天河　（越後路）
塚も動け我が泣く声は秋の風　（金沢）

があがり、文章では、

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり　（序章）
心もとなき日かず重るままに、白河の関にかかりて旅心定りぬ　（白河）
抑も、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭・西湖に恥ぢず　（松島）
三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり　（平泉）
江山水陸の風光数を尽して、今象潟に方寸を責む　（象潟）

の五か所、このような所がおおかた妥当ではないだろうか。この中で、白河の関・松島は冒頭の書き出しでいちはやく心をときめかせており、予期に違わず芭蕉を感銘させたようである。感銘とともに芭蕉の筆にも一段と力が入ったところで、文章にそのまま現われたといってよい。平泉は序章には出てこなかったが、奥の細道の途々義経関係にも興味を寄せていたことからみれば、これも芭蕉が特に力を入れていたところと、すぐにうなずけるはずである。文章に力を入れていたところが、そのまま名文となったこと、これは彫心鏤骨、推敲によるところが大きかったと思うが、発句の方は、単に労力を応えるものではなさそうである。

文章と発句と、ともに選び重なったところは平泉である。芭蕉は奥の細道の旅では、先輩古人の心を探ることを標榜していたが、風景に接した時、風景に対する感動がそのまま句にはならなかった。あまりに大きな感動は、逆にさまざまな思いが去来して、句にはなりにくいともいっている。『奥の細道』、白河の関では、須賀川の等窮の宿に泊った時、等窮が「いかに越えつるや」と問うたのに対し、「且つは風景に魂うばはれ、懐旧に腸を断ちて、はかばかしう思ひめぐらさず」と答えている。謙辞をみるべきであろうが、また芭蕉自らを満足させる句がなかったことも確かであろう。

松島の項でも、「造化の天工、いずれの人が筆をふるひ、詞を尽さむ」と記し、その夜も、「予は口を閉ぢて眠らんとして寝ねられず」と、絶句して何もいえない感銘ぶりにしている。このような思いを叙したことばは、『三冊子』にも見られる。

師のいはく、「絶景にむかふ時は、うばはれて不叶。ものをみて取る所を心に留めて不消。書き写して静かに句すべし。うばはれぬ心得も有る事なり。その思ふ処しきりにして、猶かなわざる時は書きうつす也。あぐむべからず」となり。師松島の句なし。大切の事なり。

このような言辞に対し、すばらしい風景には、むしろ口をつつしむのが礼儀だと述べる人もいる。白河の関も、